
理不尽グランギニヨル

mikomiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理不尽グランギニヨル

【著者名】

mikomiko

N2972U

【あらすじ】

平穏無事に人生を謳歌していた主人公・塗泊あまやど しるべ十四歳。ある日、いつものように深夜に一次創作を書いていたところに、薄

桜鬼のヒロイン・雪村千鶴が落下してきた！

世界に迫る危機、
迷い込む異界の獣、
しるべを巻き込む浄化システム、
対抗すべく異次元より招かれた剣士たち、

そして始まるひとつの恋。

さあ、迷える子らを導きましょ

・・・とかなんとかシリアスぶつてますが、基本コメディです。

第一話はじめのふた（前書き）

作者がらぶな描写が苦手なのでちょっと時間がかかりますが、少しづつラブコメにしていく予定。残酷描写もまさるので、シリアルス・・・も、あながち間違いじゃないかなあ？のよづな。

お相手は沖田の予定です。ただ、皆様が「こっちのがいい！」「とか、もしくは別作品からでもお相手を紹介してくださいなら考え方など、いろいろ混ぜ込む予定なので。作者が知らない作品だと、作風に合わせてキャラ崩れさせてしまう場合があるので注意。処女作ですがそれくらいは冒険しちゃいます。つたない文章になると思いますので、アドバイスや指摘（罵倒交じりも可）じゃんじゃんお願ひします！

第一話 はじまりのみ

平穏の中でも生まれ育った少女・しるべは思った。

非日常は

空から降ってくる。

「ん?」

何かに呼ばれた気がして、しるべはドアを振りかえった。

時計を見れば深夜の一時をまわったところ。わりかし早寝で寝つきの良いな家族が、わざわざじるべを呼ぶはずもなし。

首をかしげ、机の上のノートパソコンに向かう。やつと床のせいでだ。

「スタイル＝マグヌスひとつ、タイムセールで98円（通常価格105円）」と

文章を打ち込み、先の展開に頭を悩ませる。

落葉中学校三年、塗泊しるべ。平穏な国で生まれ育つた彼女は、数多く存在する一次元愛好者の一人であった。

最近は、もともとあるアニメの世界にオリジナルキャラクターを送り込み、トラブルを起こしまくり、原作をしつちやかめつちやかにかき乱す一次創作を書いている。

これがまた予想外に面白く、今では友人とともに様々なアニメ世界へ“彼女”を送り込んでいる。

「

小さく鼻歌を口ずさみながらタイピングを続けるしるべの耳に、

・・・・・
るるるるるる・・・・・・

ナニカが落下するような。否、落下していくような音が届いた。

「・・・あ?

つられて思わず、頭上を振り仰ぐ。

と同時に

ひとお

ん

水面にしづくが落ちたよつな、清涼な音がした。

不思議な感覚がしるべを包む。感じたことのないもので、たとえるのが難しいが……自分という膜の中、もともとナニカが詰まっているやうに、また別のナニカが落ちてきて、あつといつまに染み込んだよつな……ともかく、嫌な感じではなかつたよつて感づ。

まあそれほどもかくとして。

「……………ああ？」

しるべは「じ」とナイトロンなパジャマの生地で皿を覆つた。

部屋の一部。苑子の真上。

ぽつかりと暗い穴が窓こでこむよつて見えるのは、やせつりの皿がおかしいのだろうか。

「……………いやいや……………は？」

静かに混乱する苑子の視界を、

薄い桜色が埋め尽くす。

ごつしゃあ！！！

「ぐえふあつ！？」

「0号機!」?

顔面に鈍い衝撃。

いやまあ鈍い。鈍いが……衝撃の大きさが半端ない……！――！

つっつっつっ！（折れた！コレたぶん鼻の骨折れた！だつてい
たいもんはんぱなくいたいもーん！）

「つて人！？あ、ああの、大丈夫ですかつ！？」

苦悶にのたうひまわるじゆべ。

その耳に届く軽やかな声は、女子のもの。

「て何でこの部屋に敬語女子がつ！？」

「ひえ！？」「めんなさい」「めんなさいっ！」な、何が何だが、私にも

۱۹۸۷

涙でにじむ視界をこすり、鼻に手をやつ、何度も上から下へなぞる。

「うー、なんのまつたく……」

幸い折れはしなかつたらしき口の鼻を中心で壊めつつ、隣で慌てふためく人物に目を向けた。

「…………」

全体像をきりんと田に映し、再び田をこする。

まぶたや周辺の皮膚が赤くなるまでこすりとも、田の前の光景は変わらない。

桃色の着物に、薄い桜色の袴。

男子のように高く結い上げたポニー テール。

見覚えのある、といつか、あつすきる、整った可愛らしい顔立ち。

なぜか驚いた顔で見つめてくる、しるべより少しばかり年上だらつ彼女。

「…………ゆ、雪村千鶴…………？」

「…………え…………！？」

驚愕の声に応えず、無言で手を伸ばす。頭に触れ、滑らかな黒髪をなでつけ、柔らかな頬にひたと沿え、ふにっとひっぱる。

「あ、あひょ（あの）…………」

「…………生きてる…………」

「ひえ（え）？」

…………人間というのは不思議なもので。

混乱度数が一定を超えると、かえって冷静に、頭が冷えることがある。

ゆっくりと一階に降り、幸運にもおきなかつたらしい家族を確認。台所で一人分の氷水を調達して帰還した。

部屋では相変わらず雪村千鶴が居て、突然部屋から出て行つたしるべを追うか否かで迷つていたらしく、落ち着きなく部屋を見回していた。

「…………水道水ですが」

「あ、ありがとうございます……」

二人してしばし水で喉を潤し、一息ついて。

「…………あの」

「…………で」

同時に切り出した。

「あー、こいよ。じうわー」

「す、すいません……えと、ijiせひこののでしょうか？…？」

「平成×年×月、日午前一時三十一分。季節秋、×県、市」

「じつじつ・・・・え? いまいか?」

「千鶴ちゃん・・・・えと、千鶴さんの面葉でこう下野の国です」

しるべが普通に日本語をしゃべっている」とから、「日本である」とは大体察していたらしい千鶴が、「京じやないんですね…」とぼやく。

「えつと、ひとつ確認。貴女は雪村千鶴。父は雪村鋼道で、今現在新撰組に保護されている、で、間違いありませんか?」

なぜ知っているのかと思いつきの様子を見せつつも、素直にうなずく。

「んーと、はつきり言います。ijiは千鶴さんのいた時代からかなりはなれた、未来の日本です」

まあ実際の歴史とは違う世界だらうナビ、と口の中だけで追記。

「みらい・・・・!?

予想外なのか絶句する少女。大して今更ながらに爆発しそうな混乱を理性で押さえ込むしるべは、構つてられないとばかりに身を乗り出す。

「じゃあ次はこっちの質問。なんでうちの天井に穴が開いて、そこからあなたが落ちてきたのか知りたいんだけど。切に」

おまけに穴はすでに綺麗さっぱり消えている。このことからも、この状況が一筋縄ではないものだということがひしひしと感じ取れた。

「えつと、その・・・・」

何をどう話したものかと悩む気配。

しかし、はつと何かに気づいたように顔をあげると、突如目の前の少女の手を引っつかんだ。

「はー?」

「うめんなさい、ただいまは一緒に来てください……。」

「何で！？」

「くるからですーーー！」

訳分からん！—しるべのむつともな叫びに動じず、千鶴はそのまま苑子を半ば引きずるようにして一階に連れ出す。

「何!? 何なの! ?」

「早く、早く逃げないと……！」

「逃げる！？」

突然現れた一次元キャラの、突然の意味不明行動。

軽く頭痛すらおぼえるシチュエーションに、困惑していた苑子だったが……

ぱちん、と。

何かが変わった。

「…………！」

「え？ は？」

声が妙に響く。

突如として空気が入れ替わったように思えた。周囲の色彩が妙な濃さを放ち、そしてその色を持つ物質の輪郭の枠が淡くおぼろげになつていて。

取り込んでいるはずの酸素がやけに重い。周囲は妙に静かだ。

「何！？ いかにも何か出てきます的なこの感じは！？」

「早く！……！」

あせりきつた声に促され、はだしにサンダル、パジャマ姿で飛び出す。

秋の冷え始める夜の空気は鋭く肌を打つが、それどころではない――

人には気にならない。

「そういえば千鶴ちゃん土足でつむぎの階段駆け下りたよなとか考えて
いた。

がじおん・・・・・

冗談みたいな……………破壊音。

• • • • • • • • • • • • • • • • ?

一瞬、背筋を氷の手でなで上げられたように鳥肌がたつた。

異変と悪寒。何かが近づく予感。濁音つきの足音。

握られていた手を握り返す手には、じつと手汗が浮かんでいる。情けないとは思つたが、今は強く握つたままで居てくれる彼女の手にすがる他ない。

その頼りの千鶴も青ざめ、息を押し殺しながら、じつと耳を澄ませて、いるよつに見えた。

たかしるへは、その行動の意味が理解できず、焦りと疑問で頭をいっぱいでして目を瞬かせた。

だつて、しるべには丸分かりなのだ。

それが、どうからかんな速やでくるのか。

建物を通り抜けて感じたそれを、分かる人は気配、もしくは殺氣と呼ぶ。

もちろんそんなものは（たまにしか）感じたことのないしるべは、それでも本能的に危険なものなのだと感じ取つて背を震わせる。

「逃げるって……あれから…」

気配の方向を指差すと、千鶴は少しあつけにとられたような顔をしてから、しきりに納得したようになづなずか、しるべの手をひいて身を隠す。

ちゅうど“何か”が曲がつて現れる位置である。もはやがくがくと震えるしかないしるべを背に、千鶴はゆつくりと体勢を低くした。手が腰の小太刀に伸び、その柄にかけられる。

苑子は小太刀の柄を、光の小さな文字が囲み、ゆつくりと回転しているのを見た。

そして、“それ”がゆつくりと家々の隙間から這い出てきた瞬間、

女なれど流石鬼、とてつもない瞬発力で飛び出し、一瞬にして、現れた“それ”の見るからに弱点臭のする赤い玉玉を切り裂いた。

「やあ……」

一揆に元の色と空氣のにおいを取り戻す周囲に心からのため息。ころつと平静を取り戻した苑子は立ち上がり、転がっている真つ二つの玉を踏みつけた。

「なんなんだお前はあ……！」

「えー？」

「「」のやうにのやうに……」」ンクコート」」かり足跡遺してこきやがつて……」」のやうに……！」

「あああ落ち、落ち着いてください……！」

「もう大丈夫ですからー！餌さんー……！」

「……・は？」

停止。

ふうっと息をつく千鶴に、聞き捨てならない単語を耳にした苑子は、ゆづくじと振り返る。

「……・餌？」

そう、その単語が気になるのだ。

普通その言葉は、家畜やペシトや奴隸に『えられる食事を指す。それを 彼女は今、『ぐぐぐ自然に、苑子の名称として使つた ような？

「……………餌、ちゃんと？」

「……………あ」

セレジよつやく、和男装の少女は違和感に気づいたらしく。

「「「めんなさい！」」

そうよね、役割がその人の名前なはずなもの、とぶつぶつ口の中で声を紡ぐ千鶴。

「役割？」

対していまいち要領の掴めない苑子は、ますます困惑する。

同じく困った顔の千鶴は、とりあえず外は冷えるからと、部屋に戻ることを提案。まあ、確かに寒い。まだ秋の始まりだとこの辺、風上に氷の山を置いた状態で、うちわで風を強くされたように寒い。

風邪をひくのは好ましくないし、田の前の恩人にひかせるのは気がひける。故におとなしく頷いてみせる。

とりあえず、草履は脱いでもらって、スーパーの袋に入れて運んだ。ちなみに家族は目を醒ましていなかつた。

主人公プロフィール

主人公プロフィール

名前	瀧泊	しるべ
性別	女	
年齢	十四	
職業	中学三年生	
身長	百五十一センチ	
体重	四十一キロ	
性格	基本常識と良識を兼ね備えた善良な一般市民。他人に対する親切心が乏しい一面はあるものの、生死がかかわるならばその限りではない。	

親しいものや身近なものには相応に親愛の情を示す。その発言に遠慮はなく、そのツッコミに容赦はない。

二次元愛好者。薄桜鬼もあまり詳しくはないが知っている。本作内で囮にあたる“餌”的役目を担う（ほぼ強制）。

容姿 普通+可愛げ。黒髪黒目の人日本人。小柄で色白。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2972u/>

理不尽グランギニヨル

2011年10月9日02時46分発行